

小布施と私の出会いを振り返ってみたいと思います。町を築いてきた多勢の先達の人々の精霊といいますが、魂とでもいいたいでしょうか、そういったものによる安らぎの空間、折りの空間から「町」を読み取る、あるいは「地」を読み取るそのような気持ちが直感的に自分の中に働いているのではないかと考えています。

具体的には歩いて廻ることから始まると考えます。と同時に直感的な感じ方はそれぞれ違うのかもしれませんが、歩くことによって、楽しくもあり、その土地に興味が湧いてくるのです。

そうしますと、町の顔、その町の持つ雰囲気というのが見えてきます。例えば、今そこは生活経済の中心で、かつては「市」がたっていたり、あるいは生活信仰の中心であれば、鎮守の杜などが現存する今の姿から、時には遙か昔を想像したりしてみると、目に見えない何かを実感を持って、何かを伝えてくれるのです。

菩提寺が近い場所であれば、折りの空間であることが静寂の中に伝わってくるし、庄屋とか造り酒屋の門構えやお屋敷の造りの中に生産の場である雰囲気や人々が集った場所であったらうと想像され、文化の交流が行なわれ、醸成されてきたらうということが伺われます。千曲川と犀川の合流地・川中島の地では（1981年竣工：長野市立博物館）戦国の武将の心意気を確かに感じ、安曇野なら、安曇野の田園地帯、遠くの里山の景色やアルプスの秀峰といったものに豊穡といった雰囲気があります。

こうして、景観なり土地の持つ「相」のようなものが何となく解かってくる、これがまちづくりの第一歩ではないかと思えます。

小布施の場合、特に自身で歩いてみて、体で覚えた町という気がしています。自分の内面に前出の精霊達が訴えて来たような感じがあり、それが徐々に具象化していったのかも知れません。

まちづくりは「ソト」と「ウチ」の関係を重要に考えたいと考えています。我々が問題にしたい「ソト」というのは、国土レベルに見た「ソト」ではなく、もっと絞って地域レベル・生活圏レベルで見た「ソト」のことです。まさに向こう三軒両隣の規模の「ソト」をいい、ご近所それぞれの生活スタイルが互いに響き合う、共鳴・共振し合うようなエリアを指します。

敷地は別々でも大地というものは繋がっているのです。大地はひとつなのに人間社会にあっては、公共用地であれ私有地であれ、何か所有という意識が生まれます。その意識の表れとして、困ってしまったりますが、困っていても「ソト」は、「ソト」なのです。

「ソト」、すなわち外部空間はミンナで共有している、周りとバランスよく釣り合いを保っている、共振し合っている、そんなところから「ソト」を考えていくのです。

「ソト」というのは我々の生活が共振し合っているところ、人々が棲んでいる処なのです。

そこには人間だけではなく、色々なものが共生しています。むしろ、同棲している、といっているかも知れません。その色々なものとは何かと言えば、生活のための生産施設であり、歳事や祭事の折りの空間であったり、施設や装置が目に見える形として同棲しているのです。今、日本はペットブームで飼っている方も多いでしょうが、人間以外の生き物、信州に生息する動物についてもとても大事なことです。例えば野猿などがいますが、野猿とも「ソト」という概念においては同棲しているのです。植物、昆虫、河、水とも同棲していると言えるでしょう。

人と人、人とモノ、モノとモノとが同棲している、あるいは混在している処が「ソト」であり、人間だけのものではありません。ですから、同棲の関連性から言えば、土地は、その土地を持っている人だけのものではないと思うのです。大きな歴史の流れから言えば、お互いにバランスよく同棲しているわけです。

小布施で言いますと、「ソトはミンナのモノ」「ウチはジブン達のモノ」というのが合い言葉になっていて、まちづくりの原点となっています。まさに同棲社会の在り方を示していると考えます。

「ソト」について生活域の共振関係、または向こう三軒両隣の共振関係まで焦点を絞っていくと、「間」の存在というのがあります。

「間（ま）」というのは、建物と建物の間でもあり、固体と固体との間のことでもあり、堀と石垣の事を指すかも知れないし、水路と道路のことかも知れないし、生け垣や樹木の事かも知れません。色々な相対関係、「間」というのがあるわけです。

「ソト」をもっと凝縮していくと、「間」という関係があるわけです。その「間」の持つ心地よさを我々は考えなければならないと思います。よくアメニティと言いますが、私は「間」のことで、調整する装置ではないかと思うわけです。

そんな意味で「間」の空間の適度な緊張感を我々はむしろ発見し、体感しました。

まさに充実感と共に味わった至福の瞬間です。

私自身としては「間」に神経を配り、デザインする時の楽しさは喻えようがありません。他人には解らないかも知れませんが…。

「間」を意識しつつ、小布施で一つひとつの建物を造り続けるにはプロセスが勝負になるわけですが、まるでジグソーパズルを解くかのようにプロセスを踏んでいき、創り上げていった収穫が私のまちづくりの原点かも知れません。

その収穫はどういうことかという、ちょうど棟梁達が精魂込めて組み立てていく順序というものは、「間」のデザインの順序に実によく似ていると思うのです。

「ミンナのモノ」と先に表現しましたが、「ミンナのモノ」をデザインするというのは、

まさに、「間」のデザインであると考えております。私も力が入る部分であり、「間」のデザインはまちづくりの基本の一つでもあるのです。

そういうものを根底に置き、今までやってきたわけですが、振り返ってみて間違いではなかったと自分自身、確信しております。

そして、「間」の持つ公益性、「ミンナ」に対する公益性とは何かについて触れますが、「間」は小さな単位でありますから、公益という所までいかないと思うのです。要するに一つひとつの単体の間の空間であり、それがAとBの間の空間になると、AとBが共にプラスに働き、利益としてお互いにそれらを楽しむことなのです。「共益」ということがあるとすると、これではないでしょうか。しかし、「間」がそこにもここにもあるわけで、AとBの隣にはCとDが続いていたりしますから、BとC、CとDの関係というように「間」が色々、連続的に繋がっているのです。

そうすると、それは『共益』ではなく、ひっくり返してみると『公益』であるという、まさに公の利益になっていくのではないのでしょうか。

個々の共益の集合が公益ではないかと、小布施では実感した次第であります。造りながら逆に、実態が我々に教えてくれたのです。

だから、『公益』のない「ソト」というのは大変棲みにくい、悪い環境だと断言してもいいのではないかと思います。

小布施ではたまたま、「間」から「ソト」へ、『共益』から『公益』へ、と拡がっていくわけです。その拡がった一つの成果として、高速道路建設に伴い、集団移転を余儀なくされた山王島地区の30戸の集落丸ごと移転があるわけです。農家住宅が多く、母屋とか生産施設、蔵、あるいは屋敷畑、鑑賞する庭園など、そういったものの4点セット、5点セットをそっくり完備していないと、農家住宅と言えないわけです。しかも山王島集落は数百年の歴史を持っており、その皆さんがお互いに隣人関係を崩したくない、できればそのまま、ご近所付き合いを続けていきたいと感じておられ、30世帯を新たな場所に集落移転するという町の計画でした。

これなどは、小布施のコンセプトをそのまま生かしており、そういったことで成功して、皆さんから喜ばれております。

『共益』から『公益』へ、「間」から「ソト」へ、という効果、おそらく、その土地を原風景として持っていらっしゃる方々の精霊もそのまま集団で移転したような効果が結果として出てきたのではないかと思います。

これは、大変難しい実験だったと思います。我々、建築家の立場でも小布施に関して言えば、最初は建築家という個から出発し、今は個ではなく、拡がっていき、複合体というか多重体・多層体なんていうものがあれば、建築専門家達の多層的技量に当然、発展していかなければな

らないのではないと思うわけです。そうすると建築家一個人ではなく、例えばそこには、農業分野の果樹園芸とかの専門家、あるいは土木的な専門家、河川の専門家、水路工事のエキスパートなどの技術を持った人達の多層体、そういったものが大切になってくるのです。小布施では「小布施町デザイン委員会」が組織されて、たまたまその会長に私がなっているのですが、私はあくまで建築家という立場でやっているのです。

その成果が前出の「山王島地区集落移転」に非常に大きな役割を占め、発揮できたのです。まちづくりには、個のモノラル的な技量からサラウンド的な技量に変わってきていいのだと思えます。

その中で建築家は言うなれば、ホームドクターのような役割であったり、あるいは、時には制御する役割を担わなければいけないのではないかと思います。

小布施のまちづくりに関して、かつて小布施の町をつくってきた精霊達の魂を裏切ることはしなかったと自負しております。

しかも小布施の町は今も動いている、というのが私と小布施の関係であります。

## 宮本忠長



宮本忠長（みやもと ただなが）  
1927年 長野県生まれ  
1951年 早稲田大学理工学部建築学科卒業  
現在 宮本忠長建築設計事務所代表  
長野県建築士会会長  
日本建築士会連合会副会長

- 代表作
- 1981年 長野市立博物館
  - 1987年 小布施町並修景計画  
(第1期完了/現在も進行中)
  - 1992年 信州高遠美術館
  - 1995年 森鷗外記念館
  - 1997年 長野県自治会館
  - 1998年 松本清張記念館
- 受賞
- 1982年 日本建築学会賞作品賞  
(長野市立博物館)
  - 1987年 吉田五十八賞 (小布施町並修景計画)
  - 1990年 毎日芸術賞  
(小布施町並修景計画のプロデュース)